新刊紹介

染矢多喜男著『大分の神楽』

この度、染矢さんが『大分の神楽』を自費出版された。その染矢さんを改めてご紹介するのも如何かと思うが、染矢さんは元県文化財保護審議会委員であり、本会の委員として長年本誌の編集等をされ、現在は参与に就任されている。そのため本誌への寄稿作品も多く、昭和三十四年から同五十五年までの約二〇年間に三二点の論文・研究ノート・調査報告などを寄稿されている。当初の五年間は地名に関するものが中心であるが、その後は民俗芸能についての調査報告が続き、やがて民俗文化財の諸域に及んでいる。

本誌掲載の作品のみでなく、県や市町村教育委員会の報告書、市町村誌の民俗編など各方面に及んでいるが、『日本の民俗・大分』『大分歳時十二月』などの編著者としてもご高名で、染矢さんは、県文化財保護審議会の委員としては民俗文化財を担当され、この方面の保護・保存に大きな足跡を印されている。

染矢さんは「あとがき」で「大分県の神楽の概説書が欲しい、と思ってからどれだけの年月が経過しただろうか。誰も書いてはくれなかったので、結局自分で書くことになった」と述べられているが、大分県の民俗芸能を語る場合、染矢さんをおいては他に人がいないのである。私共は染矢さんがこの方面の概説書をいつになれば公刊されるか、長い間、待ち望んでいた。やっと、大分で初めて「大分県の神楽」概説入門書が出版された。その概要は次のとおりであるが、大分の文化をより深く多面的に理解するためにも、一人でも多くの方が、この神楽概説入門書をご一読されるよう推奨するものである。

本書は序文に始まり、第一章岩戸神楽、第二章採り物神楽、第三章神楽大会の三章で構成されている。第三章は大分県神楽大会と現行の四月の御嶽流神楽大会、五月の大分県神楽大会、十一月の庄内神楽祭りを紹介されている。神楽を知識として理解するのもよいが、すすんで各地の神楽に直接触れられることを念願されての章立てであろうと思われる。

しかし本書の特色は第一～二章にある。第一章の岩戸神楽は、大野系岩戸神楽・宮砥神楽、豊前系岩戸神楽、国東系岩戸神楽、日向系岩戸神楽1、日向系岩戸神楽2の五節に分けて概説されている。序文によると「岩戸神楽は配役ごとに面・衣装を異にする演劇的な神楽」で、「豊前系、国東系、日向系、大野系、直入系」などがあり、豊前系は県北に、国東系は東西国東、杵築速見に、日向系は玖珠郡と蒲江町丸市尾に、大野系は大野郡のみでなく大分市郡、竹田直入郡の他、県外や県内のあちこちに分布し、直入系は竹田市の宮砥神楽とされている。

第二章の採り物神楽は、宮砥神楽と佐伯神楽の二節で、その特色を述べられている。「採り物神楽」は「面を着けない直面で、扇・鈴・御幣などの採り物だけで舞う神楽」で、臼杵市から三重町にかけての宮流神楽と、佐伯・南郡に分布する佐伯神楽とされている。

このように県内の神楽を大きく岩戸神楽と採り物神楽の二つに大別され、それを更に芸態の違いなどによって細分されている。これらの概説では、いずれも「解説」と「沿革」に分けて記述され、解説では神楽ごとに著名な三～四の演目について、演目名・人数・所要時間・衣装・採り物、意味、舞い方などを解説されているが、読み進んでいると神楽舞台が眼前に浮かんで来る思いである。「沿革」は文献によって記述されたとしているが、そのため文献の有無によって長短があるものの、興味は尽きない。

このやさしい神楽の概説書のお蔭で、「おおいたの神楽」について体系的な理解が得られるが、更に地域文化についても考えさせられるものがある。お求めの方は大分・別府の書店か、後藤(大分市南太平寺五組の一)あて頒価二千円に送料二四〇円(切手可)を添えて申し込めば、お世話したい。

なお、子ども心に見慣れて来た西国東郡の神楽は、本書で述べられている国東系神楽よりも豊前系の神楽に近いのではないか、豊前系神楽は豊前海沿岸地域を中心として広がる神楽ではないか、こんな思いがしている。ご指導を仰ぎたい点である。

今年は十月十七日から国民文化祭が大分県で開催されるが、十九日には庄内町で全国の神楽フェスティバルが開催されることになっている。本書活用の好機であろう。

(後藤正二)